

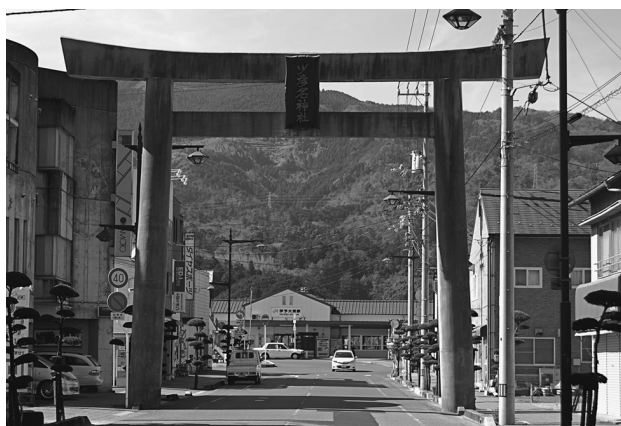
## 少彦名神社参籠殿修復に取り組む

おすくな社中 代表 叶 豊



### 1 「少彦名（すくなひこな）神社」について

JR伊予大洲駅に降り立って、最初に目に飛び込んでくるのが「少彦名神社」の大鳥居である。しかし、21世紀に入ったばかりの2001年当時、そのご本尊の「少彦名神社」がある位置さえ知らない市民が多く、杉木立に囲まれた参道から拝殿へと続く境内は荒れ放題の廃墟に近かった。



大洲駅前の大鳥居

「少彦名命」は「おすくな様」とも呼ばれ、「出雲風土記」によると、大国主命と一緒に日本の国造りをした格式高い神様で、全国の国土建設、病気平癒、産業振興を司ったとされ、土木建設業、医薬業、醸造業、殖産業をはじめ、農業・漁業・商業全般の守護神として全国に祀られている。四国においては道後温泉を発見した後、肱川に沿って南下する際に、大神に呼ばれて高天原にその亡骸を埋蔵したのが現在の梁瀬山と言われ、山頂近くに御陵がある。

全国でも珍しい「神様の終焉の地」として建立され、大洲市内全域を聖域とするほどの威光を放った「少彦名神社」がなぜそこまで荒廃してしまったのか疑問を持ち、神話から続くその壮大な歴史ロマンに魅せられて「少彦名神社」の再興と日本人のルーツを探る研究をテーマに、

職種や年齢を問わない地元有志が集まって活動を始めたのが「おすくな社中」である。

社中の調査によれば、「少彦名神社」の現在の拝殿は1931年（昭和6年）に建立され、梁瀬山の山頂付近に「御陵」と「祠」があり、中腹に「神楽殿」、裾野に「神殿・拝殿」があったが、現存しているのは「祠」と「神殿・拝殿」のみで、「神楽殿」は倒壊して原型を止めていない。1934年（昭和9年）に当時の技術の粋を集めた懸け造り方式の「参籠殿」と、参道奥に「社務所」が建設されたが、「社務所」は老朽化が激しく近年取り壊された。



少彦名神社拝殿



山頂の祠

## 2 「おすくな社中」の活動

「おすくな社中」の活動は、町おこしに関心があり「少彦名神社」の歴史ロマンに惹かれた有志12名が、2002年2月2日に設立総会を催したところから始まった。設立時から現在まで代表を叶豊が務めている。蔵川三島神社の寄町宮司にも加わってもらい、新年と、毎年春秋の「大祭（4月15日と10月15日）」時に神事を執り行っている。大祭時には、地元の有志に様々な伝統芸能や文化芸能などを奉納してもらい、年々参拝者・参加者も増えて地域住民のコミュニケーションの場としても機能している。回を重ねるごとに絵馬やお守り、「ヒコヒコ饅頭」などを独自に開発して「少彦名神社」のアピールや啓蒙に努めている。これらの活動費用の基本は「おすくな社中」の会員会費によるボランティアであり、最近グッズ販売や大祭開催のチラシ広告などで活動費の一部をま



大祭時の奉納（お茶）

かなっている。

また、発足当時から「おすくな探検隊」と称して、梁瀬山の麓から山頂まで「少彦名神社」の全容を知るために探検・調査を行っている。この活動によって、過去の神社活動資料や、「御陵」の存在などが明らかとなった。

一方、「少彦名命」にまつわる地元の調査や、全国各地の史跡・神社などを訪問調査して地域交流と情報収集を行ない、今までに山陰・東九州・岡山・能登・西九州などを訪れた。

毎年春秋の大祭を行い地元への認知度も上がってくるにつれ、「神殿・拝殿」まで長い坂道と階段を上がるのが高齢者にはつらいとの要望が増えたので、2012年参道横に「下宮」を建立し、遷座式をおこなって参拝者の便宜を図っている。



絵馬とお守り

### おすくな社中 活動年表（抜粋）

年月	行事	内容
2002. 2. 2.	おすくな社中設立総会	当時荒廃していた少彦名神社の再興を願って12名の有志で結成
2002. 4. 15.	第1回春の大祭	春は4月15日、秋は10月15日を天祭日と決めて、以後毎年祭礼と奉納を実施
2002. 10. 15.	第1回秋の大祭	
2002. 11. 24.	第1回おすくな探検隊	梁瀬山の麓から山頂まで少彦名神社の全容を知るための調査。以後定期的に実施
2003. 11. 15.	第1回全国交流事業（山陰）	少彦名命の調査を目的に全国の関係神社を訪問することとし、最初は出雲に調査実施
2003. 11. 23.	第1回地元調査	少彦名命に関する地元の史跡や由緒ある場所を調査
2004. . . . .	第2回全国交流事業（大分・宮崎）	
2005. 11. 19.	第3回全国交流事業（大阪・京都）	
2006. 7. 9.	第2回地元調査	
2007. 1. 20.	第4回全国交流事業（岡山）	
2007. 2. 3.	ヒコヒコ饅頭試作会	大祭用のオリジナル饅頭の企画のためあわしま堂で試作会実施
2007. 7. 22.	第3回地元調査	
2007. 11. 3.	第5回全国交流事業（大阪・和歌山）	
2011. 5. 18.	参籠殿修復事業開始	参籠殿の修復保存の意義を確認し、修復実行委員会発足
2011. 2. 11.	第6回全国交流事業（能登）	
2011. 6~12.	社務所取り壊し	
2011. 8. 20.	小倉八坂神社から奉納	北九州市祇園の小倉八坂神社から宮司以下3名が来訪奉納
2011. 9. 25.	小倉八坂神社へ訪問	
2012. 1. 22.	第7回全国交流事業（長崎）	
2012. 2. 19.	下宮遷座式	参道奥に下宮を建立し、神殿・拝殿まで登らなくても参拝できるようにした
2013. 10. 9.	WMF「2014年文化遺産ウォッチ」選定	



下宮遷座式

### 3 参籠殿修復事業

2011年、おすくな社中の活動において「神殿・拝殿」に上がる途中にある「参籠殿」の老朽化が問題となり始めた矢先、地元の近代化遺産調査を進めていた和田耕一氏と岡崎直司氏が「おすくな社中」を訪ねてきて、「参籠殿」の建築技術的意義と歴史的価値に基づく修復保存のアドバイスを頂いた。

急遽臨時総会を開いて、両先生からその意義と調査・修復の重要性を説明していただき、実行委員会を結成して修復事業に着手することが決まった。（少彦名神社参籠殿修復実行委員会；委員長清水英範）早速修復・保存のための足場組みと屋根シートを施工、愛媛・香川両大学の専門家による振動実験等の調査を実施した。

翌2012年12月にシンポジウムを開催して、おすくな社中関係者や一般市民が多数参加の下「空中楼阁はなぜ生まれたか？～大洲の文化遺産・参籠殿を使い継ぐ～」と題してその調査結果を発表、貴重な文化遺産としての建築的意義やその技術の高さについてアピールした。そ

の中で京都美術工芸大学の日向進先生や一級建築士の和田耕一氏らが、「現代では耐震基準の点から建築再現できない『懸け造り』という技法が大洲近接地に3棟も残っており、その中でも『参籠殿』は『三方掛け』という京都の清水寺などとは比べものにならない”奇想建築”だ。」と述べ、また、（公財）えひめ地域政策研究センター近代化遺産主任調査員の岡崎直司氏は「しかもこの大洲にそれを手がけた『中野一族』という技術集団がいたという史実は重要であり、幾多の地震や天災にも耐えて現存している遺産価値は非常に高い。」と訴えた。

それに呼応して2013年2月、米国にある「ワールドモニュメント財団（WMF）」日本支部の稲垣光彦氏が視察に来訪、「文化遺産ウォッチ」申請の段取りとなり、同月WMF副代表のヘンリー氏による来日視察もなされた。

平行して資金集めの活動も活発化、修復実行委員会全員で寄付呼びかけとPRに奔走した。

その大きな成果として、大洲市の木藤幸治氏から修復に使う檜を寄付していただけるとの申し出があり、同年2月から3月にかけて檜の用材選定と切り出しを行った後、一般市民も参加しておすくな社中関係者による「檜の皮むき作業」を実施した。

更に本格的な修復作業のための地盤調査や礎石掘り出し調査、再利用する屋根瓦の瓦下ろし作業や作業道路整備などを進めた。そしてついに2013年10月9日WMFから「2014年文化遺産ウォッチ」が発表され、世界41カ国・地域に及ぶ選定先のうち、日本からは「少彦名神社参籠殿」と「東日本大震災被災文化財」の2件が選ばれた。



シンポジウムの様子

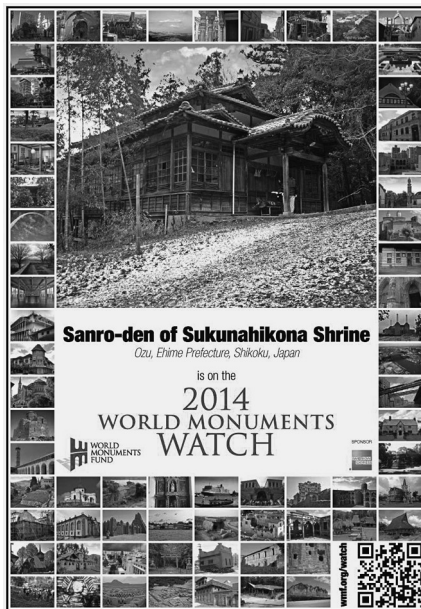


シンポジウム時の見学会

このマスコミ報道により参籠殿修復事業の認知度は飛躍的に向上し、NPO法人「NICE」から海外留学生を含むボランティアや地元子供たちによるボランティアが瓦洗いに協力していただいた。また、地元銀行や観光施設からの見学訪問やバスツアーなども企画され、多くの方々に興味を持っていただけるようになった。

#### 4 ワールドモニュメント財団による「文化遺産ウォッチ」選定

今回このような我々おすくな社中の地域活動に注目してくれた「ワールドモニュメント財団(WMF)」とは、「国や文化の枠を越えた歴史的建造物などの文化遺産の保護・保存」を目的に、「緊急に保存・修復などの措置が求められている文化遺産に対し、広く世界に向けてその現状と復旧支援の必要性を訴える活動」をしており、米国ニューヨークに本部を置く団体である。WMFでは1996年から2年に一度、世界中から集められた「緊急に保存・修復が必要な文化遺産(危機遺産)」から選定してリストを発表しており、今年で10回目となり、今までに選定された文化遺産は133の国と地域に及ぶ。



WMFのポスター

今回2013年10月9日に「2014年文化遺産ウォッチ」として選定されたのは、前述の通り世界41カ国の国・地域の67件であり、日本からはわずか2件のうちの1件が「少彦名神社参籠殿」である。

日本各地に残る「懸け造り」のうち、「少彦名神社参

籠殿」は床下の懸け部分の高さが8.3メートルと四国一高く、「懸け造り」という伝統工法に加え、近代建築手法であるキングポストトラスの小屋組み、筋交い、全面ガラス窓の透明感あふれるデザインであり、「懸け造り」様式の近代建築として希少な例である。

また、昭和初期の伝統的木造建築では大工職人と山林所有者及び杣人(そまびと; 伐採・運搬人)の協力でなされたが、現在ではその協働組織もなく経験者もいない。

参籠殿修復は、失われた生産体制を再現するなど山林と建築が一体化していた時代の貴重な経験でもあり、他の文化遺産保存に与える影響も大きく、日本だけでなく世界レベルから見た重要な財産としてのWMF選定には大きな意義がある。



愛媛新聞記事

#### 5 今後の展望

「少彦名神社参籠殿」は、本来神社に参拝するための「お籠もり所」であったと考えられるが、その建築様式や過去の歴史からは奉納舞台、あるいは結婚式場だったこともあった。つまりは宗教施設を兼ねた地域住民のコミュニティの場として、また、地域文化の伝承の場として、地域社会との不可分な関係を維持・継承していく貴重な文化遺産である。

その観点から現在「おすくな社中」が行っている活動も含めて今後の「参籠殿」活用方法を考えてみると、次のような活用方法がある。

- ① 地域行事の発表の場・・・神事を含めた奉納行事
  - \* 少彦名神社の祭礼
  - \* 各種地域のお祭り

\*正月の拝礼など

② 伝統芸能・郷土芸能の伝承の場・・・各種芸能や伝承技術の発表の場

\*能楽 \*茶道 \*生け花 \*居合道  
\*太鼓 \*お琴 \*文楽 \*神楽など

③ 地域住民の交流活動拠点・・・趣味や文芸活動の場

\*お謡い練習 \*詩吟発表 \*俳句会  
\*文芸作品展示 \*手芸作品展示など

④ 子供たちへの啓蒙・育成の場

\*ボーイスカウト \*各種サークル活動の合宿場  
\*野外自然教室  
\*バードウォッチングや森林教室等の活動拠点  
\*写生大会等学校行事の場など

⑤ 野外活動の拠点・・・休憩所や合宿所として

\*山歩き \*キャンプ \*サイクリングなど

⑥ 日本文化伝承の場・・・慶事・祝い事の会場として

\*結婚式 \*還暦祝いなどの慶事など

もちろんこれらの活動に供するためには、今後「参籠殿」の維持管理方法に関する様々な問題を解決せねばな

らない。たとえば、水道・電気等のインフラ整備、建物内外の掃除、トイレ・物置・机・椅子等の備品整備など、専属の管理者がおらず、備品・インフラが十分でない現状では、当面「おすくな社中」が中心に進めて行かざるを得ないが、将来的には敬老会などの地域ボランティアの協力や、小中学校からの奉仕活動などにより、地域全体で運営していくコミュニティーづくりの場として活用したいと考えている。

そのためにも手弁当で地域活動に取り組んでいる「おすくな社中」の現状にご理解賜り、修復事業の費用も含めた各方面からの寄付やご協力を切にお願いする次第である。



お琴



三味線



交流活動（能登）



参籠殿全景

Profile 叶 豊 (かのう ゆたか)

出生：昭和27年12月10日  
 学歴：昭和51年3月31日 広島大学工学部卒業  
 職歴：昭和51年4月1日 日産自動車株式会社入社  
       昭和55年3月31日 同社退職  
       昭和54年4月1日 叶石材株式会社入社  
       昭和58年1月1日 同社専務取締役就任  
       平成3年1月1日 同社代表取締役就任  
 論文 大洲市史談会会報第35号に投稿 「神と先祖」